

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：14501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24653138

研究課題名(和文) グローバル・アゴラ・ネットワークによる連帯の概念と組織化の方法

研究課題名(英文) The concept of Global Agora Network and its organizing methodology

研究代表者

津田 英二 (Tsuda, Eiji)

神戸大学・人間発達環境学研究所・准教授

研究者番号：30314454

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：グローバル・アゴラ・ネットワークをテーマとした冊子(報告書)『人と情報のプラットフォーム』を発行した。その中で、ネットワークの拠点としてアクションリサーチの対象としてきた実践のデータを整理し、その意味づけと解説を行う論文を掲載した。  
また、グローバル・アゴラ・ネットワークとして展開している国内外の諸実践の調査を行いデータを収集した。海外としてはフランスと韓国の調査を行い、国内は東京、千葉、富山、熊本、鹿児島、神戸の実践に着目した。特にその中で、カフェ形式で多様な人々と情報が交流する場が民間の有志の手によって興りつつある現象に、さらに概念を展開させる可能性を見いだした。

研究成果の概要(英文)：A booklet named "Platform of People and Information" in which the data of action research fields as network pivots were arranged and were give meaning by two articles was published. Also data of international and domestic practices were corrected by means of visiting and interviewing. France and Korea as oversea research fields and Tokyo, Chiba, Toyama, Kumamoto, Kagoshima and Kobe as domestic were focused. These research projects found out the possibility to develop the concept of Global Agora Network especially in the practicies established by volunteer citizens, which were performed as cafes as platforms of people and information.

研究分野：社会教育論、障害共生支援論

キーワード：グローバル・アゴラ・ネットワーク 共生 インクルージョン プラットフォーム ボランティア

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の遂行は、神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターを拠点とする。このセンターの成員は、人間性に溢れたコミュニティの創成をめざして、ジェンダー、子育て、障害、ボランティア、成人教育、ESDといった観点から、実践的研究を行っている。東日本大震災に際して、センターではボランティアバスをチャーターして学生と共に復興支援を行ったり、またセンターが行っている実践的研究のフィールドと被災地とを結びつける活動を行ったりなどしてきている。その中で、ボランティア活動参加者が、共感に基づく新しいコミュニティを自発的に創造し、公論とさらなる行動を生み出し、被災地との連帯を深めていく様子を見てきた。こうしたうねりのような実践の生起をどのように説明すればよいのか、という疑問が、本研究の着想に至った経緯である。グローバル・アゴラ・ネットワークという発想は、ハーバースのコミュニケーション的合理性(ユルゲン・ハーバース『コミュニケーション的行為の理論(上・中・下)』河上倫逸訳、未来社、1985年)を原理としているが、それに加えて近年の情報社会学や社会心理学等の知見も参照している。例えばサイバーコミュニケーションのほうか、対面コミュニケーションよりも自己開示の量が圧倒的に多いという研究結果(Tidwell & Walther, Computer-mediated communication effects on disclosure, impressions and interpersonal evaluations, Human Communication Research, No.28, 2002)や、嘘や欺瞞はサイバーコミュニケーションでも対面コミュニケーションでも等価であることの常識化(Spears, Lee & Lee, De-individuation and group polarization in computer-mediated communication, British Journal of Social Psychology, No.29, 1990)などである。サイバーネットワークの有効性を支持する研究成果が多く、東日本大震災においてもメールやブログ、ツイッターなどが共感や行動を生み出していたことを裏付けているように思われる。しかし、サイバーネットワークだけでは、行動の持続性や、対立する他者の意見との葛藤を経る公論の形成といった面で弱点がある。今回、東日本大震災に赴いた大学生たちが復興支援後にさらに新たな行動に駆り立てられ、また学内に公論の場を形成したことから、サイバーコミュニケーションを補完するコミュニティを想定せざるを得ない。本研究では、人が情報を獲得し、共感し、自己開示し、行動し、公論へと導かれる過程とそれを可能にするシステム全体を解明しようとする。

## 2. 研究の目的

本研究では、グローバル・アゴラ・ネットワークによる連帯の概念と方法を明らかにする。東日本大震災では被災者への共感が世

界中に広がり、共感に基づく实际的な被災地支援も活発に行われてきた。その際、メールやブログ、ツイッターといったサイバーネットワークが果たした役割が大きいと言われている。しかし、チャンネルを変えれば断絶することができるこれらのサイバーネットワークだけでは、一過性の共感しか生み出さないのではないか。緊急対応には有効だったが、長期的な支援のための資源となるには足りない。本研究では、サイバーネットワークを補完するシステムが駆動することで、情報が公論に発展し行動と連帯を生み出すネットワークをグローバル・アゴラ・ネットワーク(GAN)と定義し、その概念と組織化の方法を追究する。

## 3. 研究の方法

研究期間内に行うのは、次の3点である。1)東日本大震災の被災地にかけつけたボランティアへの調査、海外における震災情報の受容調査を通して、グローバル・アゴラ・ネットワークの概念を明確にすること、2)グローバル・アゴラ・ネットワークの要素を抽出し、システムの全体像を明確にすること、3)グローバル・アゴラ・ネットワークを強化するアクションリサーチに着手すること。

## 4. 研究成果

まず始めに、宮城、岩手、福島の大震災被災地との間にあるネットワークを利用し、被災地との関係においてグローバル・アゴラ・ネットワーク概念の妥当性を確認・検討した。活用したネットワークは、宮城県亘理郡の障害者施設、岩手県大船渡市の赤崎コミュニティ、福島県で被災児童支援を行っている民間組織などである。これらの被災地での復興過程において、特にサイバーネットワークをうまく活用するノウハウが開発されてきていることを発見し、そうしたネットワークに根ざした情報が全国の個人や団体との实际的な関係形成、強化に役立つことを確認した。

また、グローバル・アゴラ・ネットワーク概念の追究にあたって参照すべき近接概念を検討した。近接領域とは、特にコミュニティエンパワメント論、認識変容論、内発的発展論、ESD論、ネットワーク論等である。あわせて研究方法論についての検討も行った。特に研究と実践との関係について考究し、質的研究の方法論を検討した。

さらに、共同研究者のうち数名が、学生を中心とした東日本大震災の復興支援ボランティアを組織化するプロジェクトを実行しており、被災地での活動を行ったが、これらのボランティアの中から研究協力者を選定し、彼らを対象とした質的研究の基盤をつくった。

次に、国際的な広がりをもつ社会的課題に関わるネットワークにおいて、そのようなメディアがどのような効果をもちながら、人々

の間に共感を広め、人々の行動につながっていくかという点に焦点を当てた調査を行った。

第一に、身近な社会的課題に取り組んでいる人たちを対象とした聞き取り調査を行い、その際の共感がどのように生じているか分析した。第二に、東日本大震災被災地で活動している人たちと連携を取りながら、現地で生まれているニーズと遠方に住む人たちの意識のズレについて調査し、どのような方法によってそのズレが埋まり、支援しようという意識のある人たちの適切な行動を呼び起こすことができるのかということを追及した。第三に、東日本大震災の被災地に対する認識について、メディアを介した情報による認識と、現地に足を運んだ時に得る認識との違いについて追及した。

これらの調査研究によって、情報が公論に発展し行動と連帯を生み出すネットワーク（グローバル・アゴラ・ネットワークGAN）に際して、共感を生み出す情報とは何かということについての基本的な概念を得ることができた。ことさら、物理的に離れている対人間でメディアを介していたとしても、その人と人との間に基本的な信頼関係があることの重要性は、研究遂行過程で何度も出てきたテーマであった。

最後に、グローバル・アゴラ・ネットワークをテーマとした冊子（報告書）『人と情報のプラットフォーム』を発行した。その中で、ネットワークの拠点としてアクションリサーチの対象としてきた実践のデータを整理し、その意味づけと解説を行う論文を掲載した。また、グローバル・アゴラ・ネットワークとして展開している国内外の諸実践の調査を行いデータを収集した。海外としてはフランスと韓国の調査を行い、国内は東京、千葉、富山、熊本、鹿児島、神戸の実践に着目した。特にその中で、カフェ形式で多様な人々と情報が交流する場が民間の有志の手によって興りつつある現象に、さらに概念を展開させる可能性を見いだした。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計24件）

1. 津田英二「場の力を明らかにする」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』19, 2012年, 34-43
2. 朴木佳緒留「気がつけばここにいた」『日本の科学者』48(2), 2013, 54-57
3. 寺村ゆかの・伊藤篤「子育て支援「つどいの広場」における相談のあり方に関する一考察」『心の危機と臨床の知』14, 2013, 45-57
4. 津田英二「自分らしく生きることと労働」『日本社会教育学会紀要』48, 2012, 43-45
5. 近藤龍彰・柴川弘子・津田英二他「知的障害のある青年が大学生になることに関する

一考察」『神戸大学大学院人間発達環境学研究紀要』7(1), 2013, 135-152

6. 津田英二「障害者雇用の展開と雇用以前の問題」『日本の社会教育』57, 2013, 44-55

7. 津田英二「あなたと私の間にある学びをどう描くか」『社会教育研究』50(1), 2014, 95-97

8. 津田英二・田中耕一郎・川口尚子他「個人的な経験と障害の社会モデル」『障害学研究』9, 2013, 8-64

9. 伊藤篤・川谷和子「地域子育て支援拠点・ひろば型における早期ペアレンティング講座の意義」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』7(2), 2013, 125-131

10. 朴木佳緒留「ジェンダー平等な職場づくりのための学習課題」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』7(2), 2014, 203-210

11. 松岡広路「いのちの持続性と福祉教育・ボランティア学習」『日本福祉教育・ボランティア学習学会紀要』24, 2014

12. 寺見陽子・竹元恵子・及川裕子・松島京・寺村ゆかの・伊藤篤「養育性の育成支援のあり方に関する考察」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』8(2), 2015, 137-149

13. 津田英二「排除されるいのち、共感するいのち」日本社会教育学会60周年記念出版部会編『希望への社会教育』東洋館出版社、2013, 48-64

14. 松岡広路「持続不可能な社会を変える新しい社会教育」日本社会教育学会60周年記念出版部会編『希望への社会教育』東洋館出版社、2013, 120-137

15. 朴木佳緒留「ジェンダー平等は生活不安克服の鍵」日本社会教育学会60周年記念出版部会編『希望への社会教育』東洋館出版社、2013, 82-98

16. Eiji Tsuda, Takako Ueto, The Pradox of Intimacy in Japan: Shifting Objects of Affection, in Rohhss Chapman, Sue Ledger, Louise Townson with Daniel Docherty (eds.), *Sexuality and Relationships in the Lives of People with Intellectual Disabilities*, November 2014, Jessica Kingsley Pub, pp.99-107

17. 津田英二「民間学童保育所における子どもとおとなの学び：関与観察に基づくケーススタディ」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』7(2), 2014, 113-124

浅野慎一、森岡正芳、津田英二「人間発達環境学の発展に向けて」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』7(2), 2014, 177-189

18. 盛敏、津田英二「ボランティア学習において当事者の状況を共有することの意味：マイノリティとマジョリティ社会を媒介するボランティアの機能に着目して」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』23, 2014, 5-15

19. 津田英二「福祉教育・ボランティア学習

におけるインクルージョン理念の含意』『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』23, 2014, 27-35

20. 清水伸子、高橋眞琴、津田英二「インクルーシブな社会をめざす実践におけるインフォーマルラーニングの重層性」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』8(1), 2014, 165-179

21. 津田英二、岸本吉弘、白杉直子、平芳裕子、高見泰興、内林加奈、柴田美帆、金澤咲「校内博物館実習を活用したサービスラーニングの試みと成果：神戸大学発達科学部の実験的な取り組み」『日本教育大学協会研究年報』33, 2015, 87-99

22. 津田英二「地域の中で共に育つ・育てる環境をつくる」『ふくしと教育』17, 2014, 16-19

23. 津田英二「障害者の社会教育」再考』『月刊社会教育』706, 2014, 50-56

〔学会発表〕(計8件)

1. 津田英二「社会的包摂と福祉教育・ボランティア学習」日本福祉教育・ボランティア学習学会、2013.11.17、金城大学

2. 津田英二「あなたと私の間にある学びをどう描くか」日本社会教育学会、2013.9.27、東京学芸大学

3. 伊藤篤「子育て支援拠点の利用と脱ストレス亢進の抑止に関する研究」日本子育て学会、2013.8.28、所沢市民文化センター

4. 朴木佳緒留「女性の貧困を社会教育はどう受け止めるか」日本社会教育学会関西集会、2014.6.21、関西大学

5. 朴木佳緒留「大学の男女共同参画の課題と展望」2015.2.28、神戸学院大学

6. 松岡広路「福祉教育・ボランティア学習の新機軸」日本福祉教育・ボランティア学習学会、2014.11.8、社会事業大学

7. Eiji Tsuda, Inclusion through Reasonable Accommodation, International Rehabilitation Conference, 2014.10.29, Nazarene University, Korea

8. Eiji Tsuda 「知的障害者のライフストーリー」の実践と研究」2014 韓・日国際学術交流シンポジウム、2015.2.4、韓国ナザレ大学

〔図書〕(計4件)

1. 津田英二『物語としての発達／文化を介した教育』生活書院、2012

2. 上野谷加代子・原田正樹・松岡広路『新・福祉教育実践ハンドブック』全日本社会福祉協議会、2014

3. 朴木佳緒留編著『市民と行政のパートナーシップ研究会』神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター、2014

4. 津田英二編『人と情報のプラットフォーム』神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター、2015

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

津田 英二 (TSUDA, Eiji)  
神戸大学人間発達環境学研究科・准教授  
研究者番号：30314454

### (2) 研究分担者

松岡 広路 (MATSUOKA, Koji)  
神戸大学人間発達環境学研究科・教授  
研究者番号：10283847

### (3) 研究分担者

伊藤 篤 (ITO, Atsushi)  
神戸大学人間発達環境学研究科・教授  
研究者番号：20223133

### (3) 研究分担者

朴木 佳緒留 (HOUNOKI, Kaoru)  
神戸大学人間発達環境学研究科・教授  
研究者番号：60106010

### (3) 研究分担者

末本 誠 (SUEMOTO, Makoto)  
神戸大学人間発達環境学研究科・教授  
研究者番号：80162840